

明治、大正期の女性教育観

— 安部磯雄の場合

矢口 徹也

先日、早稲田大学で安部磯雄の生誕150年の式典があった。安部は、初代政治経済学部長、野球部長を務め、早慶戦、東京六大学野球の設立に尽力した。同時に、敬虔なキリスト教徒であり、貧困と差別の解決に取り組んだ社会主義者でもあった。1900年、片山潜、幸徳秋水らと社会主義協会を結成して非戦平和、貧困救済を訴え、初期の女性解放運動にも参加して、福田英子の『世界婦人』の発行を支援している。

明治末からの彼の女性教育に関する主張は興味深い。その著作の中で、①女性の教育は、家や国家のためではなく女性自身のためにあるべきこと、②裁縫、料理の修得、良妻賢母主義では「高等」女学校とは言えないこと、③高等教育の女性への開放は、女性の精神的、経済的自立を目的とするべきこと、と明言している。彼の女性教育観は、日本女子^{しじゆん}大学の創立委員長を務めた大隈重信、文部大臣として女学校生徒の大学入学を^{しじゆん}諮詢した高田早苗にも影響を与えている。

私生活での安部は、妻を友として尊重し、子どもたちには男女上下の別なく教育の機会を準備した。子や孫には学問、芸術分野で業績を残した人々も多い。そのひとりに孫の松原緑（後、大賀典雄と結婚）がいる。彼女は、第二次世界大戦中、軽井沢に隔離疎開中だった世界的ピアニストのレオ・シロタの下に通って音楽を学んでいる。

シロタ夫妻には大戦を前にアメリカに留学した娘がいた。戦後、再来日して、日本国憲法に男女平等を描いたベアテ・シロタである。ベアテは2000年に参議院の憲法調査会に招かれて来日した際、条文の由来について「日本の進歩的な男性と目覚めた女性たちは19世紀から国民の権利を望んでいました」と証言している。「進歩的な男性と目覚めた女性たち」とはどのような人々だったのか、男女平等にかかわる人々のつながりを考えるエピソードとして、学生たちにも伝えていきたいと思っている。



PROFILE

やぐちてつや：早稲田大学教育・総合科学学術院教授。博士（教育学）。専門は社会教育。同大学教務部副部長、大学院教育学研究科長を担当し、現在、男女共同参画推進室長。著書に『山形県連合青年団史—メディアでたどるやまがたの子ども・若者・女性』（萌文社、2004）、『女子補導団—日本のガールスカウト前史』（成文堂、2008）、『社会教育と選挙—山形県青年団、婦人会の共同学習の軌跡』（成文堂、2011）等がある。